

とにつなげたいと考えている。

〔研究成果〕

各人が国際学会での外国語（英語）による論文発表を行うことを視野に、講座（領域）を超えてメンバーが集い、それぞれの研究分野における研究成果を外国語で作成し、その過程で情報交換・フィードバックを行った。最終的に各人が今後英語論文を投稿・発表するうえでの重要な布石となる英文をそれぞれにまとめることができた。

古川は、九鬼周造に焦点をあて、主体と客体の二項対立構造を、自己とその生における偶発的關係と捉え、それをアイデンティティーの不在乃至ニヒリズムと捉えたうえで、アイデンティティーの回復にかかわり、偶発性を必然化することを論じた。池田は、シモーヌ・ヴェーユの思想を起点に、沈黙の意味を再検討する英文を作成した。石崎は対話にかかわる言語の問題を、エマニュエル・レヴィナスの「対話」と「超越」の概念から問い直す論考を上梓した。宮崎はジョルジュ・バタイユを手がかりに、子どもの「遊び」の経験を、有用性の外側という領域を提示しつつ描写している。高柳は、スタンリー・カベルと、カベルを読むポール・スタンディッシュを読むことを通して、教師教育の再構築を模索する短文をまとめた。

当コロキアムのメンバーは、それぞれが研究の対象とする思想家を読むことにおいて、外国語と格闘している。そしてその研究の成果をかたちにする段階において、外国語との格闘はさらに困難さを増す。思想との格闘と、読むこと・書くことの格闘。当コロキアムにおいてメンバーが経験した苦闘の過程は、国際化時代の大学院生の研究において核心となる活動の一端であったことは疑いないといえよう。

〔研究経過〕

私たちのコロキアムでは、池田華子・石崎達也・古川雄嗣・宮崎康子・高柳充利の五名が、それぞれの学問的な関心の違いを超え、共有する問題意識—アカデミック・リテラシーの再考と向上—に焦点をあてて学びあうこととなった。教育学講座、臨床教育学講座のふたつの講座をまたいでのこうした試みは、講座の枠はおろか、従来の学問領域、あるいは国境を超えて自らの学問的探究の成果を発信することが求められる現代の大学院生にとって、またとない刺激となった。それが筆者の偽らざる実感である。また、私たちの共通の問題意識を考える上で、2008年2月に行われた、ロンドン大学教授ポール・スタンディッシュ氏による一連の講演は大変示唆に富むものであり、当コロキアムのメンバーは積極的に参加した。氏の講演は、読むこと・書くことに中心的に取り扱ったものであり、リテラシーという概念の再考を促された。こうして、いくつもの意味合いにおいて刺激的な研究の機会を与えられたことを、心より感謝する次第である。